わたしたちの人権 168

誰もが人間として生きていくうえで侵すことのできない当然の権利これが『人権』です

子どもたちの人権作文

12月の人権旬間にあわせて、子どもたちが書いた人権作文を1・2月号でご紹介します。

今月は、清和小6年 木野遥さん、清和中3年 寺崎保乃香さん、矢部高校3年 國武朱音さんの作文を紹介します。

二学期の人権学習で学んだこと

清和小学校　6年　木野（きの）　遥（はるか）

十一月一日に、私たちは、人権センターにへき画の学習をしに行きました。へき画の話を聞いて特に心に残ったことが二つあります。一つ目は、学習をしているお母さんの姿です。このお母さんは、生活が厳しく、あまり学校に通えませんでした。そのため字の読み書きもできませんでした。ですが、3年間の学習ではなく、3年間という月日が経ったからといって卒業させられていました。そんなお母さんが学習する姿を見て、そのお母さんの子どもが、「自分も頑張る。おかしいことを見ぬく勉強をする。」と言ったことが心に残りました。私も、水俣の学習やハンストの学習、戦争の学習を思い出しました。身の回りのおかしいことに気づくため、みんなに本当のことを伝えるために学習したと思っています。

二つ目は、へき画の右側の6年生3人の男の子たちが心に残りました。解放子ども会の人たちといっしょに闘うことを決めたからです。話を聞いて、立ち上がろうとしている人たちにつながる仲間の存在がとても大切であると感じました。私の学級でも、一学期に、おかしいことに気づき、本当のことを伝えたいと志織さんが言いました。その時、私は志織さんにつながりたいと思いました。だから、この男の子たち三人の気持ちが分かる気がします。でも、三人の男の子たちは、反対されるかもしれないという不安もあったと思います。いくつものかべを乗りこえて解放子ども会の人たちといっしょに闘ったのだと思います。男の子たちの「弱さや周りのおかしさを伝える。知らせる。おかしさに立ち向かう。」という気持ちの強さがとてもすごいと思います。学校に帰ってきて、みんなで意見を出し合った時に、志織さんが「アコーディオンを持っている5年生の女の子に勇気をもらいました。理由は私も声をあげようと頑張ったことがあるからです。自分がしたことは間違ってなかったと思いました。」と言いました。私も間違ってなかったと思いました。このような人、そして、つながる人が増えていくと、差別のない世の中、平和な世の中になっていくと思います。そして、自分がその一人になれるようにしたいと強く思いました。

今回、へき画の学習をして、私は身の回りにもへき画と同じような気持ちの人がいると考えました。私たちができること、しなければならないことがあると思います。これからも本当のことを知り、正しい方につながっていこうと思いました。

人とのつながり

清和中学校　3年　寺崎（てらさき）　保乃香（ほのか）

いまだ無くならない差別やいじめ。皆さんはなぜ無くならないのだと思いますか。私は、偏見があるからだと思います。本当の事を知ろうとせず、自分勝手な考えを持ってしまうから差別やいじめは起こり、どこからか流れてきた間違った情報を本当だと思いこんでしまうから、差別やいじめは続くんだと思います。

私は今回、この作文を書く前に自分のことについて考えました。それまで、自分には関係ないことだと思っていたけれど、振り返ってみると、思いあたることがありました。

それは、小学校に通っていた頃の話です。私はクラスの中に、とても仲のよい友達がいました。だから、いつもその子と一緒にいました。このように、私のクラスは仲のよいグループに分かれて休み時間などを過ごしていました。しかし、一人だけどのグループにも属さない女の子がいました。私は、その子は一人が好きなのかな、と勝手に思いこんでいました。また、周りの女子達も、その子とコミュニケーションをとろうとしなかったので、自分も無意識に距離をとっていました。

しかし、そんなある日。私はその子と活動グループが同じになりました。そのグループには、私と仲のよい友達がいなかったので、話す相手がいないという理由でその子に話しかけました。今、改めて考えれば失礼な理由だったと反省しています。しかし、その時の会話は思いの外弾みました。正直、会話の内容は覚えていないけれど、楽しかったことははっきり覚えています。この日をきっかけに、私はその子も一緒に三人で行動するようになりました。そんな中、私とその子に共通の趣味があることを知りました。そしてもう一つわかったことがありました。それは、その子が特別一人が好きだったわけではないということです。ただ、人見知りだっただけだとわかりました。この時は、「そうなんだ」くらいにしか思っていませんでした。しかし、少し経ってから自分はその子に対し、誤った考えを持っていたんだと気がつきました。いつも一人でいるからと、勝手に一人が好きなんだと思いこみ、周りの人がその子と関わらないからと、周りに流されてコミュニケーションをとろうとしませんでした。もし、この思いこみを持ったまま周りに流されていたら、その子はいじめられたかもしれないし、私もいじめる側にいたかもしれないと思うと、自分の誤りに気づけて本当によかったと思いました。差別やいじめは、自分も気づかないところで始まっていて、関係ないと思っていても実は、加害者になってしまうこともあるんだなと思いました。

今、その子とは学校は違うけれど、それでも三人で出かけるくらい、仲のよい関係を築けています。どんなきっかけであっても今は、あの時声をかけてよかったと思っています。ちょっとした事がきっかけで、学校が変わっても連絡をとりあう仲でいれるということがわかりました。

ある人が、地球上にいる何十億という人間の中で一日二人と出会ったとして、友達になれるのは三十人、親友になれるのは五人、だと言っていました。すなわち、誰かと繋がることは奇跡だということです。今、こうして前と同じような関係でいられることもすごいことなんだなと思いました。

私は中学生になって、この清和中に転校してきました。最初は不安のほうが強かったけれど、ここは学年をこえて仲のよい学校だと思いました。特にクラスは、初日から声をかけてくれたりと、とても温かいなと思いました。この出会いも奇跡的なことだから、この繋がりを大切にしていこうと思います。

学ぶ大切さ

矢部高等学校　3年　國武（くにたけ）　朱音（あかね）

「部落差別って知っている？」

私が今月、受験のため会場に向かっているバスの中で隣の年配の女性から聞かれました。そのとき、バスの中では部落差別をなくそう、という内容の放送があっていました。私は「はい。知っていますよ。」と答えました。そうしたら隣の方は、「じゃあ、何？」と言われました。私は何も答えられませんでした。そんな私を見て「そうだよね。今の若い子は知らんよね。」と言われました。そのとき、こんなにも部落差別について勉強したのに何も言えなかった自分が正直悔しかったです。今まで何をしてきたのだろう。分かった気でいて実際のところは全然分かっていないと思いました。

そこで私は部落差別について改めて考えました。被差別部落の出身であることを理由に行われる差別が部落差別です。日本社会の歴史的発展の過程で形づくられた身分階層構造に基づく差別により、日本国民の一部の人々が長い間、経済的、社会的、文化的に低位の状態を強いられ、日常生活の上で様々な差別を受けていました。明治時代以降、その身分はなくなりました。しかし、今でも生まれた場所や育った場所を理由に差別をする人がいます。日本にとって重大な人権問題だと思います。

私は最近、結婚差別について学びました。内容は、ある女性が三年ほどお付き合いしていて結婚を約束していた相手と別れなければならなくなった話でした。ある日女性が相手の男性の家に行った際に、男性の母親から出身地を聞かれました。女性は正直に答えたのですが、その瞬間に男性の母親の表情が急に変わりました。それから男性の母親はその女性の出身地を理由に結婚を反対するようになり、電話の取次ぎをしなくなるなどの嫌がらせをするようになりました。はじめは「そんなことは関係ない。」といっていた男性も、ついには結婚をする意志をなくし、交際は終わってしまいました。相手の出身地などを理由に結婚を反対することはおかしいことです。過去にとらわれて差別をし続ける人がいることに対して理解に苦しみます。差別意識を持っている人がいるから差別がなくならない。差別はした側もされた側もいいことはありません。相手の気持ちを考える、ということをすれば分ることも多くあると思います。

私はこれからの自分についても考えました。自分がするべきことは何か。それは正しい知識を得るために学ぶことです。知らなかったでは済まされない問題です。中には、自分には関係ないといって他人事で済ます人もいるかもしれません。そんな人がいるから差別はなくならないのです。部落差別と向き合うことが大切です。一人ひとりが知り、理解し、次の世代の人に伝えていくことが私たちの役目だと感じました。言葉だけではなく、行動で示すことができる人になりたいです。